

筑波大生の Twitter 利用実態と利用に対する意識

川島 夏海

2006年に米国で開発された Twitter は、日本においても利用者数を伸ばしている。当初の Twitter は親しい仲間内でのコミュニケーションツールにすぎなかったが、今では人々に情報をもたらすメディアとしての役割も果たすようになり、実際に他のソーシャルメディアサービスと比較した際に、Twitter では利用目的として「友人間のコミュニケーション」や「暇つぶし」ではなく「情報発信・収集」を挙げた人の割合が高いという調査結果がある。しかしこれまでの Twitter 上の発言データの分析から、情報発信を中心に行うユーザーがいれば、自分に関する投稿を中心に行うユーザーもいるというように、ユーザーごとに投稿の内容や投稿数といった利用パターンの差異が存在することが明らかになっている。ただし、このような発言データの分析による Twitter のユーザー研究は行なわれているが、分析によって得られたユーザーの傾向と個人の性質の関連については十分な調査が行なわれているわけではない。そこで本研究では、筑波大生の Twitter の利用実態や利用に対する意識について一般の人々との比較を行なうとともに、そういった Twitter の利用実態や利用に対する意識と個人の性質との関連を明らかにすることを目的とした調査を行なった。

調査方法として、筑波大学の学生に対する質問紙調査を採用した。質問項目について、第1回調査では Twitter の利用実態や利用に対する意識に関する設問に加え、個人の性質としてインターネット利用歴に関する設問をとりあげた。第1回調査の結果を踏まえて実施した第2回調査では、居住形態に関する設問や大学生生活の過ごし方に関する設問をとりあげ、Twitter の利用実態や利用に対する意識との関連について調べた。

調査の結果、筑波大生は Twitter の利用実態や Twitter 利用に対する意識という点でいずれも実世界の友人関係を主眼に置いていることが明らかになり、これまでの一般の人々を対象とした調査とは異なる傾向となった。また、インターネット利用歴や大学生生活の過ごし方については Twitter の利用との関連がみられた。インターネット利用歴が長い学生では Twitter 上で情報を得られることに、インターネット利用歴が短い学生では Twitter 上で情報を発信することにメリットを感じており、参加するものというよりは閲覧するものであった web2.0 以前のインターネットのあり方の影響が示唆できる。大学生生活の過ごし方については、交友関係を重視しているタイプの学生では実世界の友人関係を主眼に置いた Twitter の利用をしているのに対して、勉学を重視し、交友関係はあまり重視していないタイプの学生では情報収集を主眼に置いた Twitter の利用をしていることが明らかになった。これらのことから、実世界の交友関係は Twitter 利用パターンの差異をもたらす要因となり得ることが推測される。

(指導教員 松林麻実子)